

第11回群馬緩和医療研究会

日 時：2005年3月5日(土)

場 所：群馬会館

世話人：堀内 龍也(群馬県病院薬剤師会)

星野 輝久(群馬県薬剤師会)

1. 当院における麻薬の使用実態調査

三島八重子, 對比地絢子, 須藤 洋行
福島 香子, 銀杏麻維子, 伊藤 理恵
齋藤 妙子, 橋場 尚子, 小池 礼子
佐藤ひろみ, 岩佐 博之

(群馬県立がんセンター・薬剤部)

【目的】 癌性疼痛緩和のために使用されている麻薬の使用状況調査を行ない、適正使用について検討した。

【対象】 平成16年4月から10月までの7ヶ月間に死亡が確認されたがん登録患者で、麻薬を使用していた152例。【結果】 152例中、注射剤のみを使用している患者は50例であった。内服・パッチ使用102例で麻薬の第一選択薬はオキシコンチンで、41%を占めていた。デュロテップ使用患者のうち、58%が注射剤を併用していた。【結論】 各種薬剤の導入により、オピオイドの切り替えは、概ね良好に行なわれている。

2. 群馬大学病院におけるオピオイド製剤の使用状況

—NSAIDsの併用状況および、フェンタニルパッチへの変更時に用いる換算比に関する検討—

小川 淳司, 飯塚 恵子, 関塚 雅之
山本康次郎, 堀内 龍也

(群馬大医・附属病院・薬剤部)

我々は、緩和ケアチームで活動する薬剤師の資質向上に寄与することを目的に群馬大学病院における年間オピオイド使用量の推移、オピオイドとNSAIDs併用の現状及び、オピオイドローテーションの妥当性を調べた。モルヒネ換算の年間オピオイド使用量は、1982年16g、1992年527g、2004年1547gと増加していた。22年間で約100倍になっていた。NSAIDs併用状況(2003.10~2004.9)は、ロキソプロフェンNa 258/511件、ジクロフェナクNa 13/511件、エトドラク 42/511件、麻薬単独処方 73/511件であり、NSAIDsは頓用が多かった。フェンタニルパッチへの処方変更は72/511件であった。他のオピオイドからフェンタニルパッチへの変更時換算150:1で計算しても鎮痛効果が不十分と思われる処方変

更が2件あった。Grond Sらが報告している換算比75:1で比べると27件が変更当初で効果不十分と考えられた。オピオイドの使用量は、使い勝手が良い徐放性製剤の採用を機に使用量が上昇したと考えられる。NSAIDsの併用は、ほとんどが頓用指示であったが、NSAIDsの有効性から継続的な併用がもっと多くても良いのではないかと考える。オピオイドローテーションにおいて、変更当初に十分な鎮痛効果が得られなかったと考えられる症例が2例あり、薬剤師は群馬大学病院の緩和ケアチームの一員として鎮痛補助薬の特性やオピオイドローテーションを熟知し、疼痛緩和治療に積極的な関与が必要と考える。

3. 泌尿器科病棟における疼痛緩和ケアへの薬剤師の関わり

茂木 久実, 加藤 敬子

(館林厚生病院・薬剤部)

中村 敏之

(同泌尿器科)

今回、薬剤師が関与し十分に患者と家族の声を聴くことでPain controlを行うことが出来た一例について報告する。65歳男性、前立腺癌。骨転移による右上腕痛と痺れによりPain control開始となる。Pain control開始時には服薬指導を行い、十分な理解を得てから患者の変化を観察していった。さらに、十分なコミュニケーションをとることでPain controlの向上につながっていった。また、回診やカンファレンスの実施等により、医療スタッフ間の情報提供がスムーズに行える状態にあった為、患者の訴えを薬剤師の立場として処方に反映できたと考えられる。今回の経験から、患者の訴えを十分に理解し、日頃から医療スタッフ間でコミュニケーションをよくとることが不可欠であると実感した。

4. 看護師外来を開設して

青木 純子, 増谷 悦子, 中村 敏之

(館林厚生病院泌尿器科)

当外来では大多数の患者、家族に癌告知をしている。